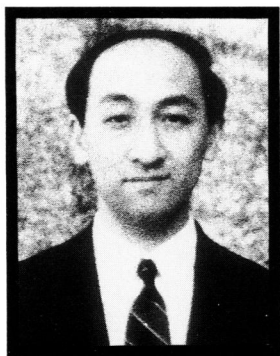


追悼 故 小 林 昌 幸 医 長



昭和58年3月

昭和58年4月

平成2年4月

平成3年4月

平成4年4月

平成5年6月

御 略 歴

北海道大学医学部医学科卒業

北海道大学医学部整形外科教室に入局

以後、北海道大学医学部付属病院、函館中央病院、
国立札幌病院、釧路労災病院などに勤務

北海道大学医学部付属病院助手

国立登別病院

Mayo Clinic 留学

名寄市立総合病院整形外科医長

1996年10月6日午前6時、自宅の電話が鳴り、小林昌幸医長の急逝の連絡が入りました。1996年4月は、故小林昌幸医長とともに後藤に代わり末永、および坂本に代わり織田の3人体制でスタートしました。10月からは麻酔科研修を積んだ西池の4人となり余裕ができ、作製中の英文論文も投稿しようといいながら、金曜日いつにもまして元気そうに列車に乗って帰札したあの御顔を今でも鮮明に思い出します。

故小林昌幸医長が名寄市立病院に赴任されたのは1993年6月、USAのMayo Clinicへの留学から帰国直後のことでした。当時は3人体制で予約制ではなく外来を15-16時に終えた後、手術を行い23時から総回診をする日が続いていたと聞いています。1996年4月より他に先駆け、整形外科外来において、患者さんの混雑および待ち時間を少なくすることを可能にし、一方では外来患者

数の増加という両面の効果を持つ予約制を導入したのも故小林昌幸医長でした。また元来、患者さんや周囲の人達に誠実で優しい一方で、非常に几帳面で自分に厳しく手を抜くことのできない性格であり、夜遅くまで病棟の仕事をした後、朝早くからランニングや英文論文の仕事をこなす日々を我々はいつも尊敬し、目標としていました。急逝する5日前、今となっては生前のfarewell operationとなる小指の高圧注入損傷の手術がありました。この外傷は創はほとんどない状態で来院しますが多くの例で完全に異物を取り除くことは困難であり、感染を併発し切断に陥ることも多い外傷です。しかし、丁寧に異物を摘出した結果、感染の併発もなく、現在軽度の屈筋腱の癒着を残すものの治療を終了しております。

心から先生の御冥福を御祈りいたします。

整形外科医長 末永直樹